母乳栄養に関する疫学的研究（中間報告）

聖マリア病院新生児科　橋　本　武　夫

1. 協同研究

新生児期栄養法別による以後の発育発達の調査：

母乳栄養児　15名
人工栄養児　12名　}の経過観察中

結果：現在経過観察中なるもまだ著名な差はみられない。ただオムツカブレ，皮フ炎などが人工栄養児に多くみられた。しかしこれが栄養の差によるものか管理手入れの問題によるものかは判断がむずかしい。

今後：引き続き1才まで経過観察を行う。

2. High Risk 産科における母乳栄養の試み

目的：High Risk Pregnant から生まれる High Risk Infant にこそ母乳栄養が必要であるという考えのもとに救急産科においても完全母乳栄養を試みた。

方法：特別な指導，母親学級などは救急産科であるがゆえ不能であった。産科新生児室よりミルク缶を追放し，とにかく児に吸いつかせるというだけの方法をとった。

結果：昭和49年1年間に209例の High Risk Infant を収容し，うち190（90.9％）が完全母乳であった。母乳＋糖を加えると205名が母乳栄養，人工栄養を必要としたものは，母親の心臓病，結核，精神病，分泌不良（巨大児）の4名のみであった。

すなわち，救急産科でさえ完全母乳栄養は可能であることを実証した。またそのためには特別な指導は不要で，とにかく母親の乳首をすわせることと，母親自身が次に入院してくる母親に対し自信をもって指導していくムードが出来上っていったことがこの完全母乳栄養の確立に大きく役立った。

3. 地域における母乳栄養と死亡率の検討

新生児外来において一地域から，生後2週以後の黄疸児の紹介が多いことに気付いた。その地域には母乳栄養を強く推進されている開業小児科医がおられ地域活動を精力的に行っている。

当院に年間約80名の遅延性黄疸児の紹介がある。そのうち上記地域からの紹介が30名であり常に高率であった。ところが福岡県全体の死亡率からみてみると，S48年度統計で6.6（出生1000に対し）上記地域の出生が972名で死亡率3.1と非常に低い死亡率であった。

これが母乳栄養と関係があるかどうか，死亡率と母乳栄養との関係，黄疸と母乳栄養との関係を現在検討中である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1. 協同研究

新生児期栄養法別による以後の発育発達の調査:

母乳栄養児 15 名/人工栄養児 12 名・の経過観察中

結果:現在経過観察中なるもまだ著名な差はみられない。ただオムツカブレ,皮フ炎などが人工栄養児に多くみられた。しかしこれが栄養の差によるものか管理手入れの問題によるものかは判断がむずかしい。

今後:引き続き 1 才まて経過観察を行う。